

自然種名に関する時間外在主義的記述説：

因果-歴史説を乗り越える

飯川 遥(Haruka Iikawa)・佐々木 豪(Go Sasaki)

無所属・無所属

1980年代以降の言語の哲学では、Kripke(1980)による直接指示説が記述説に対する代案として大きな影響力をもってきた。記述説では名前に結びついた記述(の束)がその名前の指示対象を決定すると考えるのに対して、直接指示説では名前はそのような記述に媒介されずに直接的に対象を指示すると考える。直接指示説は、命名時に成立した名前と指示対象の因果関係によって指示が成立し、その指示関係が社会的なコミュニケーションを通じて歴史-社会的に継承されるという枠組みを想定している。

もともと直接指示説は固有名の指示に関する理論として提案されたが、ほとんどの直接指示説の支持者はこの理論が「水」「酸素」、「トラ」といった自然種名にも適用できると考えている。実際、直接指示説には、「話者たちが自然種について誤った記述を受け入れていたり無知だったりしても、その種を指示できる」という外在主義的直観を説明できるという(標準的な記述説にはない)決定的な利点がある(see Putnam, 1975)。たとえば、ラボワジェは自然種名「酸素」に《すべての酸の素になる》という誤った記述を結び付けていた。それにもかかわらず、ラボワジェが酸素の発見者(の一人)であるのは、実験によって酸素を命名し、それによって生じた指示関係が現代まで継承されているからである、というわけだ。

しかし近年、少なくとも自然種名に関しては直接指示説にも重大な欠陥があることが指摘されている(Crane, 2021)。直接指示説では、話者が命名時に結びつける記述によって種が一意に確定しなくても、個体がもつ種としての本質によって、指示が規定されるとされる。しかし、たとえばトラの個体はトラという自然種だけでなく、哺乳類等の複数の自然種に属し、それゆえ複数の本質をもつと考えられる。もしそうだとすると、直接指示説では、自然種名の指示対象を一意に規定できないということになってしまう。それゆえ、標準的記述説と直接指示説のいずれも重要な欠点を抱えていることになる。

そこで本発表では、時間外在主義を取り入れることで記述説を擁護することを試みる。時間外在主義は、言葉の意味はそれが使用された時点からみて将来の出来事によっても規定されると主張する(Jackman, 1999, 2020; Collins, 2006; Tanesini, 2014; Haukioja, 2020; see also Brandom, 2019)。本発表が提案する時間外在主義的な記述説(Temporal Externalist Descriptivism: TED)では、将来の科学理論による記述が自然種名の指示対象を規定すると考える。ある自然種名が使用された時点において話者やその共同体によって結びつけられていた記述が誤っていたり、彼らとその自然種について無知だったりしても、将来の共同体がより洗練された記述をその名前に結びつけることで、指示は成功するのである。ラボワジェはたしかに誤った記述を自然種名「酸素」に結び付けた。しかし現代の科学理論がその名前に結びつける記述によって、その名前は酸素を

指示するようになるのである。それゆえ、TED にとって、外在主義的直観は問題にならない。

このことを示すために、本発表では、Psillos(1999, Chapter 12)が提案した記述説をベースに TED を具体的に定式化し、それを擁護する。

参考文献

- Brandom, R. (2019). *A Spirit of Trust: A Reading of Hegel's phenomenology*. Harvard University Press.
- Collins, J. M. (2006). Temporal Externalism, Natural Kind Terms, and Scientifically Ignorant Communities. *Philosophical Papers*, 35(1), 55–68.
<https://doi.org/10.1080/05568640609485172>
- Crane, J. K. (2021). Two approaches to natural kinds. *Synthese*, 199(5), 12177–12198.
<https://doi.org/10.1007/s11229-021-03328-9>
- Haukioja, J. (2020). Semantic burden-shifting and temporal externalism. *Inquiry*, 63(9–10), 919–929. <https://doi.org/10.1080/0020174X.2020.1805704>
- Jackman, H. (1999). We Live Forwards But Understand Backwards: Linguistic Practices and Future Behavior. *Pacific Philosophical Quarterly*, 80(2), 157–177.
<https://doi.org/10.1111/1468-0114.00078>
- Jackman, H. (2020). Temporal externalism, conceptual continuity, meaning, and use. *Inquiry*, 63(9–10), 959–973. <https://doi.org/10.1080/0020174X.2020.1805706>
- Kripke, S. A. (1980). *Naming and Necessity: Lectures Given to the Princeton University Philosophy Colloquium*. Cambridge, MA, USA: Harvard University Press.
- Psillos, S. (1999). *Scientific Realism: How Science Tracks Truth*. New York: Routledge.
- Putnam, H. (1975). The Meaning of “Meaning.” *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, 7, 131–193.
- Tanesini, A. (2014). Temporal Externalism: A Taxonomy, an Articulation, and a Defence. *Journal of the Philosophy of History*, 8(1), 1–19.
<https://doi.org/10.1163/18722636-12341263>